

第6回ノーバディズ・パーフェクト・プログラムに参加して

細藤 邦子¹⁾

2012年10月31日から12月19日までの2ヶ月間、毎週水曜日（全8日）、私は託児スタッフとして2歳以上の子どもたちを預かるノーバディズ・パーフェクト・プログラムに参加した。子どもたちと会う前に打ち合わせや、準備があつて本当に参加者の方々にとって、大切なお子さんを預かるにはそれだけ責任感を持つてことにあたらないといけないと気持ちが引き締まった。託児をする際の注意点や、実際に赤ちゃんの人形を用いての赤ちゃんの抱き方やおしめの替え方などを、e-子育てセンターの託児スタッフの方に教えていただいた。その他にも前準備として部屋の掃除や、2歳未満の小さい子がおもちゃを口に含んでも大丈夫なようにおもちゃを清潔にする、先のとがったものや、落ちてきたら危ないもの、飲み込みそうな小さなものは他の部屋に移す、子どもたちがコードに躓いてしまわないようにテープで固定するといった、普段の自分では気が付かないような細部にまで気を配つていて、新しい視点を見つかることができた。実際に経験を積んでいる方の意見や考えについて聞ける機会はとても貴重なものだと考えた。

初めて参加者のお子さんと対面する時はとても緊張した。しかし、母親とお出かけと思つて喜んでここにきたのに、母親と離れて知らない部屋で、知らない人たちと長い時間を過ごす子どもたちの気持ちを考えると私たちが落ち着いて対応しなければという気持ちになれた。そうした視点も学生託児スタッフや、e-子育てセンターの託児スタッフの方と一緒に学んだり、教えていただいたりする中で持てるようになったものだ。それでもやはり緊張してしまつたが、第一回目はつつがなく

終えることができた。私の担当したお子さんは、大きい子チーム中でも一番年齢が高く、よくお話しし、よく走り、自分でできる・やりたいといった気持ちの強い子だった。そうして順調に過ぎていったつもりだったが、ある日、母親と離れるのを嫌がつて泣いてしまったことが一度だけあつた。母親は、「朝から機嫌が悪かつたんですよ」と言つていたが、私はその時この子は今まで我慢してつたのではないかと、それに気が付かずに遊んでつた自分を不甲斐なく思つた。母親と離れて部屋でずっと泣いてつた時に、ベテランの託児スタッフさんが「抱っこしてあげると良いかも」とアドバイスしてくださつたので実行した。最初はいやいやと蹴られてしまつたが、蹴りながらも小さい手がしっかりと私の服をつかんでつたのを見て安心した。「お母さんに会いたい」というその子のお話を聞き、「お母さんは今もっとあなたと仲良くなるためにお勉強してつるんだよ。」と伝えると、いろいろと質問してきて徐々に落ち着いてつた。その後からは少しずつわがままのような行動も出てきて、可愛いばかりではないけれど、充実した時間を過ごせるようになったと感じた。

毎回、託児後に報告会があり、そこで、参加者が育児や日々の生活についてどう感じているのか、どんな所で大変なのかを知ることができた。参加者同士で話を聞いてもらつたり、助言してもらつたり、共感してもらつというところがとても大切なことなつたろうなと感じた。回を重ねるごとに何となく子どもたちの様子も、お母さんたちの様子も明るくなり、それをみんなで嬉しく思つことや、他にもたくさんの方の貴重な経験をすることができて本当にNPに参加することができてよかつたと感じた。

1) 広島文教女子大学大学院人間科学研究科教育学専攻